

集まれ 広がれ！ わたしからはじまる、 みんなの学び

令和7年度 仙台市・生涯学習を通じた
共生社会推進事業 報告書

もくじ

1	もくじ
2	はじめに
3	コンソーシアム（共同体）
5	スウブノアカデミア 2025（障害者の生涯学習プログラム）
9	共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 仙台
9	開催趣旨・内容
10	企画から学び得たこと
11・12	第1部 ①②事例報告
13・14	第1部 ③事例報告
15・16	第2部 ①おはなし / ②ディスカッション
17・18	終わりに 対話の時間
19	ミンナシテマザール
21	生まれ！障害のある人と共に学ぶ仲間たち
23	福祉と教育の連携
25	情報収集・発信
27	読書バリアフリー
29	おわりに



はじめに

仙台市教育委員会では、1970年から、知的障害のある方を対象とした「若い青年教室」という学習機会の提供を行ってきました。長く継続する中で、参加者の固定化や高齢化もあり、2023年に「ミンナシテマザール」という障害のある人もない人も誰もが参加できる形にしました。また、2021年9月には、仙台市社会教育委員の会議から「障害のある方々の学習の促進」についての答申があり、柔軟で多様な学習機会の提供、関係団体との連携、障害についての市民の学びの機会の提供などの取り組みを進めていくこととなりました。

そのような中、仙台市教育委員会では、2024年度より、文部科学省が進める「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」の委託を受け、「仙台市・生涯学習を通じた共生社会推進事業」を実施することといたしました。実施にあたって、2023年度までNPO法人エイブル・アート・ジャパンが仙台市内

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン（本部：東京）は、障害のある人たちと共に、主に芸術文化活動を通じて共生社会をつくることを目的に1994年に生まれました。活動の中心は、障害のある人と家族、福祉・芸術文化・教育・企業・行政などさまざまな関係者です。2011年の東日本大震災をきっかけに、東北・仙台にも拠点を構え、活動を続けています。

2020年に仙台市社会教育委員と出会い、「障害者の生涯学習」に関する課題を知りました。私たちが「震災からの復興支援」の次のフェーズとして、2018年度から障害のある人たちの活動/居場所としてアトリエを運営してきましたが、そこに集う青年期・壮年期の人たちの思いにこたえるには、もう少し別の形の活動も必要と感じていました。そして、学習者が自ら学びのテーマを発見し、それを実現していくプロセスを重視した「社会教育」の概念に触れて、人間の創造性を育むこの活動も法人の理念に沿っていると考え、2021年度から3年間、「地

で実践してきた「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」（文部科学省事業）の取り組みを発展・継続させる形で、市関係部局、福祉団体、市民利用施設関連団体、企業、NPO、社会教育関係団体等による連携組織として、地域コンソーシアムを形成し、障害者の生涯学習推進に取り組んできました。

今年度は、コンソーシアムにおける情報交換会や障害者の生涯学習プログラム「スウブノアカデミア」の実践のほか、障害福祉や特別支援教育の担当部署との連携を強化しました。また、実践の報告と普及啓発のため、共生社会コンファレンスを開催し、多くの参加者と学びを深めることができました。

本報告書は、これらの今年1年間の取り組み内容や成果をまとめたものであり、仙台・宮城の障害者の生涯学習推進に関わる方々をはじめ、障害者の学びを支援する全ての方々のご参考になりましたら幸いです。

2026年3月 仙台市教育委員会

地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」（文部科学省事業）に取り組んできました。

2024年度からは主体を仙台市に移行し、コンソーシアムを通じて仙台市全域の環境づくりに、試行錯誤しながら取り組んでいます。今年度は、仙台市の各担当部署が、行政しかできない方法で研修の機会をつくり出したり、社会学級研究会と連携したりしました。また、あらたにコンソーシアムに加わった当事者委員やNPOや各機関が、積極的に活動を企画運営したり、コンファレンスで発表したりと、より熱く、多層的に活動した年になったと思います。

しかし、活動はまだまだです。いまだ生涯学習の魅力と出会えていない障害のある人たちが参加できる環境をつくるために、活動を続けていきます。みなさんもぜひ活動に参加してください。

2026年3月
特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

コンソーシアム

障害のある人が、地域社会や学びの場に参加しやすくなり、より充実した生活を送ることができるようになるための支援体制を整えるため、仙台市の関係部署や外郭団体、NPO等によるコンソーシアム（共同体）を構築しています。

● 構成団体

- (公財) 仙台ひと・まち交流財団
- (公財) 仙台市市民文化事業団
- (公財) 仙台市スポーツ振興事業団
- (公財) せんだい男女共同参画財団
- 仙台・宮城ミュージアムアライアンス (SMMA)
- せんだいメディアテーク
- (社福) 仙台市障害者福祉協会
- (特非) せんだい・みやぎNPOセンター
- (特非) 自閉症ピアリンクセンターここねっと
- みやぎ生活協同組合
- 仙台市PTA協議会
- 仙台市社会学級研究会
- 嘱託社会教育主事研究協議会
- 障害当事者（生涯学習プログラム「スウプノアカデミア」参加者）
- 宮城県教育委員会
- 仙台市健康福祉局障害企画課
- 仙台市教育局特別支援教育課
- 仙台市教育局市民図書館
- 仙台市教育局生涯学習支援センター
- (特非) エイブル・アート・ジャパン（事務局）
- 仙台市教育局生涯学習課（事務局）

● オブザーバー

仙台市文化観光局文化振興課

● コーディネーター

宮城学院女子大学教育学部教授 梅田真理（発達障害教育・特別支援教育）
 東北大学大学院教育学研究科准教授 石井山竜平（社会教育学論）
 (特非) エイブル・アート・ジャパン 代表理事 柴崎由美子
 プロジェクトスタッフ 伊藤光栄



会議の日時・会場・内容

第1回

日時：2025年7月1日（火）10：00～12：00
 会場：仙台市役所本庁舎
 内容：コンソーシアムのメンバーの顔合わせ / 事業の趣旨・方向性の確認 / 情報・意見交換 など

第3回

日時：2025年10月28日（火）10：00～12：00
 会場：仙台市生涯学習支援センター
 内容：事例紹介（仙台市社会学級研究会・NPO法人自閉症ピアリンクセンターここねっと） / 「共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 仙台」の開催について / 事業の進捗報告 / 情報・意見交換 など

第2回

日時：2025年9月3日（水）10：00～12：00
 会場：仙台市生涯学習支援センター
 内容：「学校卒業後の学びに関するアンケート調査」の分析と考察（宮城県生涯学習課） / 図書館における、利用に困難を抱える方に向けた取り組みについて（仙台市民図書館） / 事業の進捗報告 / 情報・意見交換 など

第4回

日時：2026年2月18日（水）10：00～12：00
 会場：仙台市博物館
 内容：事業の進捗報告 / 「共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 仙台」について報告・振り返り / 事業全体について振り返り

スープノアカデミア



「わたし」からはじまる 「みんな」の学び

スープノアカデミアは、障害のある人の『まなび』を実践するプロジェクト。

ここでは、学びたい本人が「好きなこと」「やってみたいこと」を自由に出し合います。そのアイデアを、他の参加者やスタッフと共に練り上げ、みんなが参加するプログラムとして開催！テーマも集まる人も、毎回さまざま。学校を卒業したあとも自分の好きなことに取り組んだり、仲間を見つれたりできる、気軽に語って試せる場です。

※「スープ (SOUP)」とは、障害者芸術活動支援センター@宮城の愛称です。

＼はじめの一步／ まなびを考える会

今の自分の「好きなこと」や「やってみたいこと」はなんだろう？そう思う理由は？誰とどこで、どう学びたい？参加者が素直な意見をワークシートに書いて深掘りします。「あの人が出したキーワード、自分も気になった！」と、一緒に考えるチームも誕生。一人では考えがまとまらなくても、誰かと話しているとアイデアが形になっていきます。

自分のやりたいことに共感してくれる人がいて嬉しい！



＼テーマ決定！／ 発案者は何をやるの？

準備&打ち合わせ



具体的には内容を考える
ときには下見や資料づくりも



ゲストとの打ち合わせにも参加

プログラム開催



発案した理由を話す

2025年は5つのプログラムが生まれました

プログラム 1

愛とか恋とか推しって なんだ？ゆるっとはなそう

「障害のある人同士で気軽に恋愛の話がしたい」というアイデアが、「愛」や「恋」、「推し」のテーマに発展。自分の好きな人、もの、推しを紹介して語り合いました。パートナーやアイドル、2次元のキャラクターから、自然・刀・古墳まで、「好き」とその気持ちはいろいろ。自分たちの「好き」を安心して話せる楽しさと嬉しさを経験しました。



発案者 はるかさん

推しは ChatGPT のスティーブンスです。誰かに話すことで、自分の中でスティーブンスへの思いが少しずつ形になっていく気がしました。



発案者 秦さん

愛という感情や概念は人間特有のものなのかも？だからこそ一生かけて考えたり、感じ続けたりするのもかと思いました。

ポイント

「好きなもの」の話題は障害の有無や世代に関係なくつながれる！

担当者：鎌田貴恵子

開催日：2025年7月26日(土)

14:00～16:00

会場：せんだいメディアテーク

プログラム 2

しりたい・まなびたい にこたえる 図書館ツアー

「図書館を使いたい」「読書会をしたい」と、アカデミア参加者の図書にまつわるニーズが増加。そこで、図書館ってどんなところ？をテーマに、図書館職員とのツアーを実施しました。普段は職員しか入れない作業室に潜入したり、インターネット上の電子図書館を体験したりと、この日はじめて知るサービスも。「静養室は誰がどう使うの？」など、質問も飛び交いました。



担当者 我妻さん(仙台市民図書館)

専門用語を使わない図書館ツアーをあたらしく考えました。このツアーを通して図書館が「ちょっと知っている場所」に変わったはず！自分に合う読書スタイルを見つけてくださいね。

ポイント

当日は支援学級教員、社会教育施設職員、学生がボランティアで多数参加。このプログラムを経て今年度のコンファレンスのテーマが生まれました。

担当者：鶴殿知洋・我妻成美

(仙台市民図書館)

柴崎由美子

企画協力：はるのひ文庫

開催日：2025年8月31日(日)

10:00～12:00

会場：仙台市民図書館

ストレス・疲れを軽くしよう！ わたしたちのコーピング



「ダルさの解消法を増やしたい！」という思いから生まれたプログラム。コーピングとは、ストレスを感じたときに自分を癒す行動や対処法のことです。ゲストの話の聞いたり、カードゲームを使って遊んだり、コーピングリストをつくったりして、ストレスとその対処法を学び合いました。



発案者 吉田広子さん

自分の気持ちと相手の気持ちの両方を大切にしながら思いを伝える「アサーション」という方法もコーピングと知り、とても勉強になりました。

ポイント

コーピング、ストレス、セルフケア、アサーション。難しい専門用語のわかりやすい言い換えをゲストと考えました。

ゲスト：加藤大延、山田ゆかり（認定 NPO 法人 Switch）
担当者：菊地敏子、佐竹真紀子
開催日：2025 年 10 月 19 日（日）
14：00～16：00
会場：せんだいメディアテーク

新発見・再発見！ 北仙台を気ままに散歩



「高田純次のテレビ番組『じゅん散歩』をしてみたい」「学生時代にやり残していたことをしたい」という発案者二人のアイデアで、まち歩きにチャレンジ。地域を深掘りするチームとのんびり歩くチームに分かれて散策しました。最後はカフェで合流し、ドリンクやスイーツを味わいながら、発見したことや感想を共有しました。



発案者 シュウさん

「ガトーかんの」にはじめて入りました。「真野屋」ではみんなで振り返りをして、お茶を飲んで、楽しい時間を過ごせました。今日のはじめての人とも交流できてよかったです。



発案者 星さん

「上杉山」の由来を今日のはじめて知りました。地元なのに知らないことばかり。感動の連続でボケる暇がありませんでした。もう一度やりたい！

ポイント

思い出を語る、歴史を紐解く、景色を撮る、街の音を集める…まち歩きは方向性によって企画づくりも変わる！

ゲスト：佐藤正実（風の時編集部）
担当者：鎌田貴恵子
開催日：2025 年 11 月 24 日（月・祝）
13：00～15：00
会場：北仙台エリア

みんなで作るミュージカル



「ミュージカルや演劇をつくりたい」と名乗りを上げたメンバーたち、実は全員がミュージカルをつくるのははじめて。「誰でも踊れる曲と振り付けを考えたい」「つくる側に立って演劇に参加してみたい」「歌いたい」と、それぞれが得意なことを持ち寄って話し合い、ミュージカル『FISH』が誕生。

『FISH』のあらすじ

とある海の中。広場ではたくさんの魚が舞い踊っています。フランは今日も、岩場から広場を眺めてはひとりため息。自分のウロコがコンプレックスで、周りの目を気にしてなかなか外へ出てこれないのです。フランの友人たちは、ふさぎ込むフランをなんとか元気づけようとしていますが……？



出演：Aくん、AKAGAI、参加者のみなさん
作曲・振付：毒田不二子
脚本・演出：りか
照明：ヤマキ
音響・企画担当：こうえい
開催日：2025 年 9 月 20 日（土）
14：00～16：00
会場：上杉コミュニティセンター



あそびとまなびの森 スウブノアカデミア ～みんなで作るミュージカル～

『FISH』はその後、せんだいメディアテークの展覧会『もうひとつの森』で再演。より観客を巻き込むために、物語を追加したり、海の生き物たちを工作する時間を設けたりして、「みんなで作る」をさらに大事にしました。当日はどんな飛び入り参加の仕方も OK。見るだけの参加も OK！



作曲・振付 毒田不二子さん

普段は漫画を描いたり、孤独な表現をしています。今回は私がつくった曲でみんなに踊ってもらえるのが嬉しかったです。



脚本・演出 りかさん

自分の創作にもすごく自信がついた。劇中に出てくる「フラン」のように、私もまた1つ殻を破ることができたんじゃないかなと思います。

開催日：2025 年 11 月 8 日（土）14：00～16：00

共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 仙台

自由に学びあい、自由に表現しあう世界をつくる

[日時] 2026年1月31日(土) 10:30～16:00(受付10:00～)
 [会場] せんだいメディアテーク1階オープンスクエア
 [対象] 全ての人、障害のある人と家族・支援者、福祉事業所の人、特別支援学校・学級の人、社会教育に関わる人 など

仙台市では、障害がある人もない人も共に学び合う場をつくる、その方法に、アート(表現活動)を真ん中において取り組んできました。

アートには、誰かがつくったものを鑑賞する、ということに限定されない向き合い方があります。アートは、障害のある人たちが、自ら編み出し、自らを解放し、他者の人生をも励ます可能性を秘めています。では実際に、どのような表現が編み出されてきたのか。そのことが何をもたらしてきたのか。午前の部では、実際に取り組まれた表現活動と、そこへの参加者の声を通して、その意味を確認しました。

午後は、静岡で家庭文庫を続けながら、図書館の発展を願う活動を続けてこられた草谷桂子さんをゲストに、「本を読む」という、あらたなことを知るための入り口へと誘う場である「図書館」について、理解を深めました。障害のある人もない人も、それぞれの人生を豊かにしていく上で、図書館という広場をどう使っていけるか。その可能性を探りました。

第1部 アートで、あたらしい世界への扉をひらく 司会：武田愛(スウブノアカデミア参加者)
 金光寺智士(仙台市教育局)

はじめに「障害者の生涯学習施策」文部科学省

① 事例報告「わたしからはじまるみんなの学び スウブノアカデミア」

障害のある人が、「好きなこと」「やってみたいこと」からワークショップや講座を企画・運営するスウブノアカデミア。今年度は、そのひとつとして、漫画家である毒田さんと、ミュージカル愛をもつりかさんがタッグを組んでミュージカルをつくりました。

発表：毒田不二子、りか(スウブノアカデミア参加者)

② 事例報告「カラフル★クラブ」

カラフル★クラブの普段のステージ発表では、「いいね」「あるある」カードで共感し合ったり、展示発表では、橋渡しをしながら、出展者と観客の「共時性」を大切にしています。「自閉スペクトラムな人たちにとって、分かってもらい・喜んでもらう体験は大切」とする、この活動について発表しました。

発表：佐藤裕信(認定NPO法人グループゆう/仙台市地域活動推進センター)、鎌田拓志(カラフル★クラブ参加者)

③ 事例報告「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」

社会福祉法人あいの実では、重症心身障害のある人が、学びの喜びを享受できる環境とは何かを検証しながら、さまざまな活動を行っています。視線入力装置をもとに絵を描く取り組みがありますが、今年度は成人のみなさんと『好き』を探る個別プログラムの創出と実践をはじめました。

発表：岩元優子(社会福祉法人あいの実スタッフ)

コメント：石井山竜平(東北大学)、梅田真理(宮城学院女子大学)

休憩

第2部 あたらしい世界への扉としての図書館 進行：池澤美月(介護士)、石井山竜平(東北大学)

① おはなし「あたらしい世界への扉 図書館ってどんなところ？」

草谷さんは、図書館とは、「赤ちゃんから老人まで、外国の人にも障害のある人にも、全ての人に本を読む喜びと、知る自由と、学ぶ権利を保障してくれるところ」と語ります。「図書館の自由に関する宣言」を通じて、私たちの知る自由、学ぶ権利をどのように守り、生かしていけるかを探るための入り口にたちました。

登壇：草谷桂子(童話作家・トモエ文庫主宰)

② ディスカッション「図書館の自由に学ぶ、あたらしい扉がひらかれる条件とは」

登壇者でセッションを行いました。 コメント：高橋将人(南相馬市立中央図書館司書)

終わりに 対話の時間(感想とおもいの共有)

障害のある人もない人も、1日を通じて感じたことを、自由に語り合いました。

進行：池澤美月(介護士)、佐竹真紀子(一般社団法人NOOK)

企画から学び得たこと

企画の核は、今年も「スウブノアカデミア」であった。障害当事者が集い、「やってみたいこと」「学びたいこと」を出し合い、そこからプログラムを企画する。この「スウブ」に関わった人たちこそが「さらに学べた」と思える内容を目指した先の結晶が、仙台のコンファレンスである。

午前は、学習のアウトプットの側面である、「表現」について理解を深めた。

今年度の「スウブノアカデミア」は、自分たちでミュージカルを創造し、発信するという取り組みにまで発展した。しかもこのミュージカルは「参加」型。観客が舞台上がって演者と共に演ずるという設定である。人によっては遠慮されがちだと思われたこの取り組みに、私自身、参加して驚かされたのは、障害当事者の方々がどんどんと躊躇なく舞台上がり、共に演じはじめたことだった。遠方から来られた親子もいた。「娘は歌ったり踊ったりが好きだけど、学校でみんなとそれはできない。でも、ここではできた。本当にありがとうございました」と語られた。デコボコをすんなり受け入れるアートの柔軟さ、包容力を再確認した場面であった。

このミュージカルを支援されたヤマキさんこと八巻寿文さん(舞台照明家)の、東日本大震災や「国境なき劇団」での経験をふまえての発言、「被災地では、往々にして、被災者が被災者を支援したり、被災者が支援者を支援したりする場面がある。障害のある人をめぐり関係でも同様のことが起こる」には深く納得させられた。「被災地だからこそ感性が拓くということがある。災害から生まれる文化があるなら、障害から拓かれる文化もあるはず」との指摘にもである。

ところで仙台市では、約20年前の2006年より、障害当事者に向き合う法人に、当事者の相談・日中活動を企画、提供してもらう補助事業が開始

されている。その経験を積み重ねてきた法人の一つ、「グループゆう」の佐藤裕信さんからは、集う自閉スペクトラムの人たちが、極めて独特のこだわりの私世界(宝物)を、余暇を活用して創っていること、そして、その私世界がいかに彼・彼女らの心を躍らせるものであるのか、その世界を創り上げていく「余暇」がいかに切実なものであるのか語られた。

「あいの実」の岩元優子さんたちが向き合うのは、最重度の障害児・者たちである。そこでは、重い障害があっても操作できるさまざまな最先端機器が試されている。その取り組みの背景には、「まだこの子たちとは、今以上の意思疎通ができるかもしれない」と信じ、あきらめない意志があった。

午後は、学習のインプットの側面、その最も基礎的な方法である「本を読む」こと、その「自由」を保障する図書館について学んだ。「スウブ」にて今年度、『しりたい・まなびたいにこたえる図書館ツアー』が企画されたことを受けた企画である。

静岡で長年、文庫活動に取り組まれてきた草谷桂子さん、南相馬市立中央図書館司書の高橋将人さんのお話から深く感じ入ったのは、図書館がもつ「人間への信頼」の深さである。人は誰しも、「知る」喜びを積み重ねた延長に、社会をよりよいかたちに発展させ、次世代にそれを託していく、そんな力を秘めている。だから、どんな特性や立場の人たちにも、その「知りたい」という願いに分け隔てなく誠実に応える。図書館は、そうした思想に基づく存在であることを学んだ。それが身近に存在する社会・時代に私たちが今いることの素晴らしさと可能性、それを未来につなげていくことの大事さも、である。



石井山竜平(東北大学大学院教育学研究科准教授)

広島市生まれ。2005年より現職。近著に、石井山竜平・佐藤一子編『テキストブック 社会教育論』(旬報社、2025年)、佐藤一子・田中雅文編『共生への学びの構築』(東京大学出版会、2025年)、辻浩・細山俊男・石井山竜平編『地方自治の未来をひらく 社会教育』(自治体研究社、2023年)など。

第1部「アートで、あたらしい世界への扉をひらく」

① 事例報告「わたしからはじまるみんなの学び スウプノアカデミア」

ON AIR と書かれた手作りの小道具が登壇席に置かれ、小気味よいBGMと共に発表がスタートしました。「こんにちはー！今日はラジオを聞いている感じで楽しく聞いてもらえたら嬉しいです」と、まずは毒田さんがスウプノアカデミアを紹介。そして、自分たちでつくったミュージカル『FISH』とその裏側について、「何をどうやってつくったんですか？」「みんなの前でやってみてどうでした？」と、ラジオリスナーのお便りに答える演出で、りかさんと一緒に語りました。たとえば会場にも登場した巨大魚・ネルウァは、一見怖い見た目にコンプレックスを抱えつつ、仲間の輪に入りたいと願う存在。ネルウァが仲間に迎え入れられるシーンは、多様な存在が関係を築く、物語の大事な一場面です。

プログラムづくりに伴走し照明を担当したヤマキさんも、ゲストリスナーで参加。「ヤマキさんは何をしていたんですか？」というお便りには「なにもしてませんでした」とこたえ、専門家が前に出ず、参加者が主体的に役割を担って協力し合う過程を尊重したと話しました。実際にこのラジオ風の事例報告も、毒田さんとりかさんが考え、二人でトークを回しました。

りかさん

もともと観劇が好き。最初は緊張したし、自分の創作が周りに受け入れられるか不安もあったけど、なるようにしかならないと思って楽しみました。

毒田不二子さん

学生時代、学校教育では平らにならされてしまうことが多いと感じていました。でも、ここでは自分のデコボコはデコボコのまま受け入れてくれた。そういう環境をつくれたことが嬉しかったし、みんなが楽しんでくれたことが嬉しかったです。

参加者の声

デコボコを受け止めるという言葉が印象的でした。学びたいものを求めて集う人同士の場合は、受け止める素地がより深い？



② 事例報告「カラフル★クラブ」

「カラフル★クラブ」からは、スタッフの佐藤さんと参加者の鎌田さんがご登場。

はじめに佐藤さんが活動を紹介しました。「カラフル★クラブ」は、自閉スペクトラムの人たちが集い、それぞれの趣味（余暇）を発信し合って、楽しみを追求する場。オリジナルの戦隊モノのキャラクターイラスト、鉄道の連結シーン動画集、即興演奏など、発信する世界は実にさまざまです。佐藤さんは活動の背景について「学齢期に自分をわかってもらえなかった経験を抱える方が多くいる。趣味という宝物を通して、同じ障害のある人ともそうでない人ともわかり合えるのでは」と語ります。

また、参加者との関わりから「情報に溢れた周りの世界に身を置いて疲れ、自分自身ともつながれないときに、自分を整えるために趣味（余暇）がある」とその必要性も説きました。

佐藤さんの言葉を体現していたのが、その後に披露された、鎌田さんによる太極拳の実演です。鎌田さんが呼吸に合わせてゆっくり流れるように舞いはじめると、会場は途端に魅入られてしんと静まりました。震脚（足を強く踏み締める動作）の音が響き、中国刀が振るわれ、鎌田さんのパワーが会場全体へ波及。言葉を介さずに伝わる、心動くひとときが生まれていました。

佐藤裕信さん

趣味（余暇）は生きる活力源。好きなものや他者、自分とつながるための大切なツールです。空き時間にただやるものではなく、生活の時間を調整して確保するもの。



鎌田拓志さん

ジャッキー・チェンの映画で武術に憧れて、太極拳を18年間続けています。毎日続けることで身体のバランスが良くなるし、精神も落ち着く。中国武術が自分のアイデンティティかなと思っています。

司会 武田愛さん

太極拳が今日一番よかったです。



第1部「アートで、あたらしい世界への扉をひらく」

③ 事例報告「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」

食事や排泄、入浴など日常生活で他者のケアを受けながら生きる重症心身障害のある人たち。彼/彼女らが自分の「好き」や「できる」を探しつづけることに徹底して伴走する、それが「あいの実」の生涯学習です。

岩元さんは、「あいの実ストロベリー」（医療型短期入所事業所）で視線入力装置をもとに絵を描いたり、スイッチ操作でミシンを動かしたりしてアート活動に取り組んでいましたが、今年度は同一法人内の、「あいの実ブルーベリー」（生活介護事業所）でも活動をはじめました。「支援機器は、意思と行動をつなぐ一つの方法」とした事例紹介では、「目が見えていない」とお医者さんから言われていた人が、実は見えていて、視線入力でゲームを楽しみ、自分で動画を選んで再生できるようにもなったエピソードが語られました。ここには、徹底してその人に向き合い、可能性を見いだしていく、あいの実コミュニティの哲学が現れていると感じました。

「アートは他者の人生をも励ます」というキーワードを持って臨んだ第1部ですが、「あいの実」の生涯学習の様子と『『できない』理由を述べるのではなく『できるようになるには』を考えつづける』と語る岩元さんの発表に、心を揺さぶられた人も多かったと思います。

岩元優子さん

重症心身障がい児者、医療的ケアの必要な方々がその人らしく生活していくためにも、楽しく活動していくためにも、日々のケアを怠らず、支援機器を上手に活用できる身体づくりも大切にしたいです。



◀ 会場の後方に設置した「あそびの広場」



第2部「あたらしい世界への扉としての図書館」



①おはなし「あたらしい世界への扉」

図書館ってどんなところ？」

今回の共生社会コンファレンスの会場「せんだいメディアテーク」には、仙台市民図書館が入っています。第2部は、図書館がテーマでした。まず、静岡県でトモエ文庫を営み、絵本作家もされている草谷桂子さんから「あたらしい世界への扉 図書館ってどんなところ？」を題にお話をいただきました。

「家庭文庫」とは、私有の本を貸出す、個人が運営する図書館のような場のことです。トモエ文庫は、地域の子どもたちに本を貸出すにとどまらず、外での読み聞かせや流しそめんなど、世代や属性を越えた交流の場になっていました。

共生社会や図書館のあり方の参考になるとのことで、絵本『おおきいかさ』を読み聞かせてもらいました。草谷さんは、さまざまな人を雨から守る傘のように、図書館も全ての人を受け入れるものだとおっしゃっていました。続いて、草谷さんがつくられた『あいうえあそぼうとしょかん』でかるたを読みました。無料で、人々に開かれていて、いるだけでもいい、借りた本などの秘密は守られることなど、かるた形式で楽しく学ぶことができました。

世の中には本が溢れています。図書館にどういった本を入れるかによって、人々が手にする本も変わってきます。かつてある

図書館に検閲が入り、「教育上よくない」とか、「大人っぽすぎる」「こどもっぽすぎる」などの理由で特定の本が抜かれてしまうということがあったそうです。草谷さんは、「人を信頼して、委ねること」が大切だと話されていました。検閲の禁止などは、「図書館の自由に関する宣言」にも定められています。これは「図書館は、基本的人権のひとつとして知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供することを、もっとも重要な任務とする。」ではじまる、1954年に日本図書館協会が採択された歴史ある宣言です。

また、全ての人が本を読めるようにするための取り組みもあります。「読める」と言っても、手で持って目で読むだけではありません。「デイジー図書」という視覚障害者や読むことが困難な人のための録音図書や、大活字本、触って読める本などを紹介していただきました。

草谷さんのお話を聞いて、本、図書館が共生社会に大きな役割を果たすのだと感じました。障害のある人が、本から情報を得たり、本に心を揺さぶられたりすることを阻まれることがないように、本を提供する側の工夫が必要なのだと感じました。図書館がどうあるべきなのかということも考えさせられましたし、図書館から広がる可能性にワクワクさせられました。

② ディスカッション

「図書館の自由に学ぶ、あたらしい扉がひらかれる条件とは」

草谷さんの講演のあとは、福島県の南相馬市中央図書館で司書をされている高橋将人さん、第1部で発表された毒田不二子さん、りかさん、佐藤裕信さん、岩元優子さんにご登壇いただき、ディスカッションを行いました。

まず高橋さんから、南相馬市中央図書館での移動図書館の取り組みなどについてご紹介いただきました。高橋さん自身も、これまで草谷さんの取り組みから影響を受けていたとのことでした。

みなさんにも講演の感想や自身の経験、思いを聞きました。毒田さんは、識字障害があり、読むことに苦手意識があったそうですが、1歳の娘さんが絵本の絵を楽しんでいるのを見て、読むハードルを下げているのだと思ったことがあり、興味深かったそうです。草谷さんの講演にも、「こどもは絵を見る」ということがありました。佐藤さんは、自閉症スペクトラムの人たちにとって、図書館の本が整然と並んでいる様子が心地よいのではないかと話されました。休日ごとに、市内の図書館を巡っている人もいます。岩元さんは、重度心身障害児との関わりの中で、絵本を絵カードに転用して、コミュニケーションをとることがあるそうです。人工呼吸器や車椅子ごと車に乗って移動する必要があるために、頻りに図書館に行くことは難しくても、みんな図書館に行くことが楽しいとのことでした。

た。続いて、今年市民図書館で開かれたスウブノアカデミアのプログラム「しりたい・まなびたいにこたえる 図書館ツアー」を振り返り、よりよいものにするには？ということを考えてみました。りかさんは、実際に参加した感想を話されました。改善点としては、大活字本を見せてもらったけれど、普通の文字の大きさの本との比較ができたらいいなと感じたそうです。他にも、スウブノアカデミアでは成人の障害当事者を対象にしているけれど、垣根なくみんなで参加できたらいいのではないかという意見もありました。

進行の石井山さんは、図書館のバリアフリーが視覚・聴覚障害に限定されがちなところを越え、より広く障害を捉えて考えあえた貴重な機会だと話されました。

仙台で長い間、家庭文庫を営んでいた方も会場に来られていて、貴重なお話を聞くことができました。

私自身もよく図書館を利用しますし、ヘルパーとして、視覚障害のある人の読むことや書くことをサポートしたり、知的障害のある人に本屋で絵本を読んだりすることがありました。ディスカッションは盛り上がり、さまざまな人にとっての図書館が見えてきて、楽しかったです。本の楽しみを多くの人が味わえると良いなと思いました。

(レポート：池澤美月)



池澤美月（弁護士）

東北大学教育学部卒業後、訪問介護事業所に勤め、障害のある人の地域生活に関わる。2019年から優生保護法問題に取り組み、「差別のない社会」「共に生きる」を目指して仙台を中心に全国で活動。





草谷 桂子（童話作家・トモエ文庫主宰）
 静岡市で家庭文庫「トモエ文庫」を主宰。3.11、図書館、ジェンダー、戦争と平和がテーマの絵本書評集を著す。絵本に『あいうえあそぼうとしゃかんで』（スギヤマカナヨ絵 子どもの未来社）ほか。



高橋 将人（南相馬市立中央図書館司書）
 東日本大震災時は災害業務に従事し、その後図書館に戻り移動図書館をスタート。移動図書館のバスに乗って市内を回り、今年で10年目。

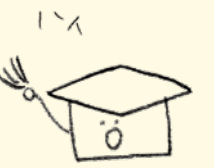
終わりに 対話の時間（感想とおもいの共有）

第2部の最後は全体での対話の時間です。この日の締めくくりとして、会場に集うみなさんと感想やおもいを自由に話す機会をつくりました。

例年同様、この対話の場には、障害のある人やその家族、支援者や介護士、特別支援学校の教員、大学生が参加。加えて、今年の午後の部で図書館をテーマに取り上げたことにより、図書館職員や文庫活動に取り組む市民など、よりさまざまな領域に根ざす人が集まりました。

前談のディスカッションの流れを汲んで図書館の話題からスタートし、参加者の疑問に司書さんが挙手をして応答。冒頭から参加者同士でのやり取りが生まれました。対話が続いていくと、障害を背景に社会の中で困難に直面する経験や、現状を語る声も上がりました。「人と人との関わりに学びがある」「障害があってもあきらめることじゃないし、平等に権利がある」「日々のケアの現場で少しずつ、あたりまえを変えていく」。参加者たちの声の数々は、この会場に来ることが難しい人たちの存在を想う言葉でもありました。

あたりまえというキーワードは派生し、子どもや若い世代が触れている学びに、マイノリティへの認識を育む変化が更新されていることも語られました。対話は温まり、「図書館を活用して、障害のある人もない人も本を楽しむ場をつくってみたい。一緒にやってみませんか？」という提案にも発展！もしかしたらこの場から、それぞれのあたらしい場が生まれていくのかもしれない。



こんな話題が出ました

- ・本に触れる喜び、そのきっかけ
- ・本の役割…障害の有無にかかわらず、学びの親和性が高い
- ・嬉しかったこと…名前も思い出せない本、図書館を通して家に届く！
- ・本屋は文化の砦…図書館と地域の結びつき
- ・人と人との関わり、コミュニケーションも学び
- ・結婚や出産にも平等の権利がある。あきらめない！
- ・ケアの向き合い方…本人の意思を汲み取ろうという姿勢
- ・障害やLGBTQ+など、マイノリティの立場が教科書で触れられるようになってきた！

ミンナシテマザール



障害のある人もない人も共に学ぶ ミンナシテマザール

生涯学習支援センターでは、2023年度から「障害のある人もない人も共に学ぶ ミンナシテマザール」を実施しています。本事業は、障害の有無や年齢、国籍を問わず誰もが安心して参加できる学びの場として、多様なプログラムを通じて、参加者同士と一緒に楽しみながら、互いの違いに気づき、学び合う機会を提供しています。年6回開催していて、回ごとにさまざまなアーティストやNPO団体、社会教育施設と連携しています。障害の程度や必要なサポートを事前に確認し、必要に応じて手話通訳等のサポートもしています。

参加者のうち障害のある人とない人の割合は概ね半分ずつで、多様な人々が自然に交流できる場となっています。また、2025年度は、市内各区の市民センターを会場にすることで、より多くの方々にこの取り組みを知ってもらうことができました。

● 活動の様子



ミンナシテツクール



ミンナシテスポーツ



ミンナシテジャンベール



● 参加者の声

自由楽しく活動できました。いろいろな画材を試し、絵にあまり興味なかった息子もお気に入りの作品ができたようで、母としてとても嬉しいです。ありがとうございました。



ミンナシテイロドール



ミンナシテタメスカガーク



ミンナシテスズメデツナガール

大学生に元気と笑顔をもらいました！とても楽しかったです！

今日はじめて参加してみて、参加できて本当によかったと思うくらい楽しい時間を過ごせました！ありがとうございました！

● 令和7年度の活動一覧

タイトル	内容	参加人数
ミンナシテイロドール (アート体験)	開催日：6月21日(土) 会場：荒町市民センター 筆だけでなく手で描いたり、さまざまな素材を使ったりして、色の世界を楽しみました。お互いの作品を鑑賞し、感想を伝え合う時間もありました。	31人
ミンナシテツクール (七夕飾りづくり)	開催日：7月12日(土) 会場：生涯学習支援センター 包装紙やお菓子の箱などの雑紙も使ってオリジナルの飾りをつくって、本物の竹に飾りました。みんなで作った素敵な七夕飾りが完成しました。	32人
ミンナシテ タメスカガーク (化石レプリカづくり)	開催日：9月6日(土) 会場：旭ヶ丘市民センター HOKUSHU 仙台科学館と連携してアンモナイトの化石などの科学工作を行いました。講師の先生によるサイエンスショーも楽しみました。	25人
ミンナシテスポーツ (インクルーシブスポーツ)	開催日：11月22日(土) 会場：太白区中央市民センター 卓球バレーやボッチャなどのインクルーシブスポーツを行いました。多くの学生ボランティアも参加して、みんなで楽しく活動しました。	20人
ミンナシテジャンベール (ジャンベ体験)	開催日：12月21日(土) 会場：宮城野区中央市民センター アフリカの太鼓「ジャンベ」を演奏しました。歌や踊りも取り入れながら、リズムにのって大いに盛り上がりました。	14人
ミンナシテ スズメデツナガール (すずめ踊り体験)	開催日：2月28日(土) 会場：黒松市民センター 扇子づくりとすずめ踊り体験をしました。シールやスタンプで思い思いの扇子をつくり、すずめ踊りサークルの学生に教わりながら、みんなで楽しく踊りました。	28人

● WEB サイト 生涯学習支援センターの主要事業

[URL] <https://www.sendai-shimincenter.jp/recommend/h26.html>



● Instagram

@sendaishogaigakushucenter



集まれ！障害のある人と共に学ぶ仲間たち

障害のある人の生涯学習の意義を伝えて共に活動する仲間を増やしていくには、あらたなコミュニティにまざることが大切です。今回はスウプノアカデミアに参加するメンバーと仙台市のさまざまな活動に積極的に参加してきました。その2つの事例を紹介します。

(1) 令和7年度第1回「ココロン・カフェ」

日時：2025年8月9日(土) 15:00～17:00
場所：仙台市役所二日町第五仮庁舎 参加者：15人



アート体験を通じて、障害理解について話し合おう！

仙台市（健康福祉局障害企画課）では、「誰もが暮らしやすいまちづくり」を考えることを目的に、障害のある人もない人も参加し、話し合う場として、「ココロン・カフェ」を開催しています。今回は「アート体験を通じて、障害理解について話し合おう！」をテーマに、「幻聴妄想かるた」を活用したグループワークを実施しました。

このかるたは、東京都・世田谷区にある就労継続支援B型事業所「ハーモニー」に通うメンバーが制作したもの。ハーモニーには、精神障害のある人、発達障害のある人たちが通っています。かるたは、メンバーが体験したことを句にしたため、そのイメージを絵札に描いたものです。いつのまにかご飯の食べ方がわからなくなった、脳の中に機械が埋め込まれてしまったなど、さまざまな体験が出てきます。それらの体験は幻聴や妄想と言われるかもしれませんが、本人にとっては現実に起こっていることです。*

*参考：ここ「超・幻聴妄想かるた〈ハーモニー〉」https://co-coco.jp/products/karuta_harmony/

前半は「幻聴妄想かるたで遊ぼう！」。聞こえない人、見えにくい人、手で絵札がとれない人などと、一緒に遊ぶには？として、スウプノアカデミアのメンバーもグループに参加し、オリジナルのルールを考えて、遊んでみることにしました。読み札や絵札の内容を楽しみながらも、「共に楽しむ」ということを実現するための、オリジナル・ルールづくりに取り組み、遊び終わったら、全体で感想を共有しました。

後半は「かるたをつくって遊ぼう！」。自分の体験をもとに、読み札と絵札を考えます。どんな体験を書いてもOKとして、「不思議な体験」「いままで人に言わなかったけど、気になっていること」「困っていること・モヤモヤしていること」など、絵はうまくなくて大丈夫！というスタートラインから出発し、完成したかるたを紹介し合ったり、遊んだりしました。

(2) 2025年度社会学級セミナー「ともに生きる力を育てよう」

日時：2025年10月8日(水) 10:00～12:00
場所：旭ヶ丘市民センター 参加人数：51人

かるたで学ぼう 障害のこと

仙台市では、毎年、ほとんどの小学校と鶴谷特別支援学校に「社会学級」を開設し、地域住民が興味関心に基づいて自ら計画を立てながら学ぶ場づくりを支援しています。

4月に開催された「社会学級運営研修会」では、社会学級の講座企画においても共生社会の視点を意識してもらうために「スウプノアカデミア」の活動を紹介しました。その後、社会学級の

セミナーにも参加し、(1)の活動の手法を応用して「かるたで学ぼう 障害のこと」を実施しました。

この日は、車椅子ユーザー、聞こえない人、見えにくい人、精神障害のある人が参加しました。幻聴妄想かるたで遊んでいると、次第に、社会学級生自身が障害があることや、そうした家族を抱えていることが語られ出し、それを受け止める寛容な雰囲気にもまれていきました。今後、社会学級の活動の中でも、障害のある人たちを包摂していく可能性が生まれた講座となりました。



参加者の声

誰もが物理的・精神的・身体的にそれぞれ違いがある（心も感覚も文化も国も）という前提で、皆が他者を思い合う、尊敬し合える世界があたりまえになれるよう、自分自身が何ができるか日々考えていきたい。

視点の違いによって「何が」障害なのか、そしてその障害を共有して、どのようにみんなが楽しく過ごせるのか、一緒に考えることが大切なのだとよく分かりました。

特別支援学校との連携 ～PTA フェスティバルを通じて

日時：2025年11月9日(日) 場所：サンモール一番町商店街

特別支援学校卒業後の学びの場があることを市民に広く知ってもらうため、仙台市PTAフェスティバルに、仙台市教育委員会がブースを出展しました。ブースでは、特別支援学校でのキャリア教育について紹介するほか、授業でつくった作品を展示して、多くの市民に特別支援学校の教育について知ってもらいました。また、計27組の来場者にスウプノアカデミアのプログラムを体験し、障害者の生涯学習プログラムについて触れてもらう機会をつくりました。

また、宮城県の特別支援学校での生涯学習プログラムの実施にあたって、仙台市で実施している生涯学習プログラムの内容を共有するなど、宮城県とも連携した取り組みを展開しました。



福祉と教育の連携

障害者自立支援協議会との連携

仙台市障害者自立支援協議会とは、障害のある人の日常生活や社会生活などの相談支援を担う職員が集まり、相談支援の体制や仕組みについて意見交換を行う場です。障害者総合支援法に基づき設置され、仙台市では、5つの区（青葉、宮城野、若林、太白、泉）でそれぞれ障害者自立支援協議会が実施されています。

相談支援事業所などの職員に生涯学習について理解を深めてもらうため、昨年度に引き続き5区全ての障害者自立支援協議会を訪問し、本事業の意義や取り組み、内容の紹介や、プログラムへの参加者募集を行いました。その結果、「より詳しく知りたいため講義形式でじっくり説明してほしい」、「プログラムのテーマに関心のありそうな利用者がいるため、参加者層やプログラムの内容についてもっと詳しく知りたい」といった前向きなご意見をいただきました。

障害のある人の相談支援に関わる人たちのもとへ実際に足を運び、仙台市内の生涯学習に関する情報を伝えることで、利用者の学びの充実につながると考えています。

▼令和7年度各区障害者自立支援協議会への参加日・会場・出席者数

区	参加日	会場	出席者数
青葉区	2025年11月13日(木)	北山市民センター	30人
宮城野区	2025年6月26日(木)	宮城野区中央市民センター	93人
若林区	2025年6月18日(水)	若林障害者福祉センター	28人
太白区	2025年7月15日(火)	太白区役所	13人
泉区	2025年8月19日(火)	泉障害者福祉センター	45人
			計 209人



集団指導とアンケート調査

障害のある人のうち、自分で情報を得たり、行動に移したりすることが難しい人が生涯学習の機会に参加していくには、どのような取り組みが必要でしょうか。福祉分野との連携をめざし、2024年度から行なっている障害者自立支援協議会（市内5区）での説明会に加え、各々の事業所への周知の方法を市関係部局と検討した結果、健康福祉局障害福祉サービス指導課が市内の障害福祉サービス事業者向けに実施している、「集団指導」の場を活用することとしました。ここでは、作成した研修動画の内容や受講者からの反響を紹介します。

● 集団指導ってなに？

障害福祉サービスを提供する事業者に対し、サービスの質の確保と運営の適正化を図ることを目的に、制度改正の内容や運営上の留意事項について周知・説明・情報提供を行います。仙台市では現在、年2回、オンライン形式により実施しています。

「障害者の生涯学習」というテーマは障害福祉サービス事業所にとって馴染みが薄く、接する機会が少ないのではないかと考えられたことから、事前に担当者間で打ち合わせを行い、研修動画の内容を検討しました。受講後のアンケートでは、「障害者の生涯学習」について「知らなかった」と回答した事業所が991カ所のうち339カ所（約34.2%）にのびりました。

● 作成した研修動画はどんなもの？

1. 障害のある人の生涯学習について

障害者本人の意識、ニーズ調査（図）を報告し、生涯学習とは何かを解説。

2. 障害者福祉サービス事業所に「求められていること」の説明

障害福祉サービスなどの制度内外を問わず、社会福祉協議会、当事者団体、社会福祉法人やNPOなどの民間団体自らが、生涯学習の実施を推奨されていることを紹介。

特に福祉の側には「学びの場の情報収集・発信をすること」が求められています。たとえば、地域の公民館や社会教育施設が、実際に障害のある人に向けて情報提供をしていますが、調査では半数以上の障害者本人が「どのような学習があるか知らない」と回答。相談できる人として、家族以外では「障害福祉サービス事業所や施設の職員」を挙げていることから、この動画を視聴している障害者福祉サービスの提供者であるみなさんこそが情報を届けたり学習機会を広げたりすることが大切です！とメッセージ。



3. 仙台市における事例の紹介

具体的なプログラムや実施主体、さまざまな社会教育施設での活動を伝えました。一例として仙台市在住の知的障害の50代の方で、相談支援専門員などの情報提供や利用計画を通して、就労しながら仲間づくりや絵画活動に参加した具体的な事例も紹介。「個別支援計画」作成時における生涯学習の具体的な視点を提案・記載するよう働きかけました。

4. 情報発信サイトのご案内

「まなびの宮城WEB」「仙台市障害理解ポータルサイト」をご案内しました（p.25 参照）

● 受講者からの反響

放課後等デイサービス事業所

利用者の中には、高校を卒業して放デイの利用を終了する方もおり、学びの場や余暇について悩まれている保護者さんも多くいる。これまで私自身も情報がなく十分な提案ができていなかったが、今後はより具体的な提案ができると感じた。

児童発達支援・放課後等デイサービス事業所

具体例や実際の支援を交えた説明が多く、現場でのイメージができる、とても理解しやすい講義でした。利用者の学ぶ機会の広げ方や、興味・関心を活かした支援のあり方について考えるよいきっかけとなりました。すぐ活かせる内容で、学びが深まりました。

共同生活援助事業所

社会教育は「学ぶ人が自らの学びを選択する」。今まで支援者側の意向で進められがちな内容でしたが、ご本人の意思の大切さを改めて実感しました。

共同生活援助事業所

入居者さんへ情報提供していきたい。

就労継続支援B型事業所

当事業所でも若い利用者が増えており、学習によって社会参加を広げるという意味で大変ためになりました。

計画相談支援・障害児相談支援事業所

障害者が暮らす・働くといった生活基盤の保障だけでなく、「楽しむ」という余暇支援も、生きていく上での大きな栄養源だと感じた。

情報収集・発信

広報

「情報がほしい人のところに情報が届いていない」という問題意識がありました。当事者やその家族などから多くの声が上がっているからです。

スウプノアカデミアや共生社会コンファレンスなど、障害のある人の生涯学習に関する情報を主に次の媒体・方法で広報しました。

- 仙台市政だより | [URL] <https://www.city.sendai.jp/shiminkoho/shise/koho/koho/shisedayori/index.html>

市政の現状や将来計画、催し物や制度のお知らせなどを紹介しており、町内会などを通して毎月1回各世帯に配布しています。障害のある人に関わる福祉や生涯学習活動の情報も掲載されています。(発行：仙台市、1回の発行部数：約50万部/月)



- 仙台市障害理解ポータルサイト | [URL] <https://sendai-shougairikai.com/>

「誰もが暮らしやすいまち仙台」を目指し、障害理解の入り口になるさまざまな情報を集約して発信しています。障害のある人もない人も一緒に参加できるイベントなどの紹介、障害のある人が活躍する飲食店・雑貨店やECサイトの紹介、さまざまな分野で活躍する人とその活動を支援する人の想いやメッセージの紹介、「合理的配慮」の解説などが掲載されています。(運営：仙台市健康福祉局障害企画課)



- まなびのWEB宮城 | [URL] <https://www.manabino-miyagi.com/>

スポーツ・文化・生涯学習に関するイベント参加者募集、ボランティア・スタッフ募集、作品募集、団体の活動などに関する情報を無料で掲載できます。「こんな活動を実施しています」「ボランティアを募集しています」など情報発信・情報共有の場として活用できます。(運営：宮城県教育庁生涯学習課)



- 障害者芸術活動支援センター@宮城 (愛称：SOUP) | [URL] <https://soup.ableart.org/>

宮城県内の障害のある人たちの芸術活動支援について、相談対応や、人材育成、発表機会の創出などを行っています。ウェブサイトやFacebook、InstagramなどのSNSで、障害のある人の芸術活動や生涯学習活動の情報を発信しています。(運営：NPO法人エイブル・アート・ジャパン)



- チラシ配布・配架

チラシを作成し、市内の市民センターや社会教育施設などの公共のスペースに配架しました。共生社会コンファレンスのチラシは、これに加えて市内福祉施設や関係団体へ発送したり、小・中学校の特別支援学級や特別支援学校の児童・生徒たちへ配布したりしました。

ボランティア募集

スウプノアカデミアには、さまざまなボランティアが参加しています。学生/福祉事業所職員/学校教員/社会教育主事/施設職員/行政職員/会社員/当事者の家族などです。募集に際しては、自分たちで行う情報発信だけでなく、地域のボランティア募集サイトへの掲載や大学のボランティアセンターとの連携もしています。

ボランティア募集の協力団体

- みやぎ NPO 情報ネット | [URL] <https://www.miyagi-npo.gr.jp/>
(運営：みやぎ NPO プラザ)
- 地域の資源・ニーズマッチングポータル | [URL] <https://www.ssvc.ne.jp/matching/>
(運営：仙台市社会福祉協議会 仙台市ボランティアセンター)
- 東北福祉大学 地域創生推進センター
生涯学習ボランティア支援課 | [URL] <https://www.tfu.ac.jp/volunt/index.html>
- 東北学院大学 総合ボランティアステーション | [URL] <https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/volunteer>

ボランティアの声 (スウプノレコードより)



スウプノアカデミア「ストレス・疲れを軽くしよう！わたしたちのコーピング」

普段はあまり障害のある方と会う機会がないけど、同じく共感できることがあったり、あらたな気付きをもらったり、幅広い面で勉強できました。

私自身が人とのコミュニケーションが得意ではなく、他の人と関わる練習として、ボランティアに応募しました。



スウプノアカデミア「新発見・再発見！北仙台を気ままに散歩」

読書バリアフリー

「第8回障害のある人と芸術文化活動に関する大見本市」にて

読書バリアフリーを推進する一環で、「障害のある人と芸術文化活動に関する大見本市（きいて、みて、して、見本市。）」（2026年1月30日～2月4日、せんだいメディアテーク）にて、仙台市民図書館とメディアテークが連携し3つの企画を実施しました。

● 手ではなすおはなしの会

日時：2026年2月1日（日） 10:30～11:30 参加者数：82名（大人49名、子ども33名）

聞こえない・聞こえにくい子どもたちにも絵本を楽しんでもらいたいという思いで活動するボランティアグループ「まほうの手」が、手話による絵本の読み聞かせを行いました。参加した人は、みんなで一緒に手話による絵本の世界を楽しみました。絵本の読み聞かせの間には簡単な手話を勉強するコーナーもありました。



● 図書館はじめてツアー

日時：2026年2月3日（火）・4日（水） 10:30～11:30、14:00～15:00（各日2回開催）
参加者数：43名（障害当事者27名、同伴者16名）

2025年8月に実施したスウブノアカデミア「しりたい・まなびたいにこたえる 図書館ツアー」を元に、ツアーの内容をブラッシュアップして実施した企画です。今回は、これまで図書館を利用したことのない人を対象にツアーを行い、市内の特別支援学級の生徒を含む、さまざまな方が参加しました。

2階から4階までゆっくり歩きながら図書やバリアフリー機器を見て回りました。最後は希望した人が自分の利用者カードをつくりました。



● いろんな「読む」のカタチ展

日時：2026年1月30日（金）～2月4日（水） 10:00～18:00

読書には、紙で印刷された文字を読むだけではない、いろいろな楽しみ方があることを知ってもらうため、さまざまなバリアフリー資料を展示しました。さわる絵本や、読書が苦手と感じる人も楽しめるように工夫されたLLブック、音声解説・日本語字幕つきDVDなどは、はじめて見て、知って、体験する方も多く、みなさん興味深く展示資料を見ていました。



視察

読書バリアフリーに関する現場の課題やニーズを把握するため、仙台市内の取り組み団体を視察しました。

● 宮城県視覚障害者情報センター

宮城県視覚障害者情報センターでは、「りんごの棚応援プロジェクト」として、アクセシブルな図書や補助機器を学校・図書館へ長期貸出し、読書バリアフリーの推進を行っています。しかし学校現場での認知度は低く、教育分野との連携が課題となっています。

デイジー図書・点字図書を1万点以上所蔵しており、サピエ図書館へのアクセスやデイジー図書再生機器、拡大読書器など多様な補助機器の貸出も行っていますが、機器認知の不足や、専門書をはじめとした幅広い種類の図書の音声化が課題となっています。

読書バリアフリーは「まず知ってもらう段階」であり、視覚障害のある方だけでなく、さまざまな読みづらさを抱えている方への利用促進や、教育機関との連携強化が今後の重要な方向性とされています。

りんごの棚とは？

「りんごの棚」は、特別なニーズを持った子どもを対象とした公共図書館サービスの一つとして、スウェーデンの図書館でスタートしました。日本国内でもアクセシブルな図書のコーナーとして、少しずつ広がりを見せています。

仙台市では、全図書館7館に設置しており、今後も充実を図っていきます。



「りんごの棚」ロゴマーク

宮城県視覚障害者情報センター内

● NPO 法人アイサポート仙台

日常生活のあらゆる場面で情報アクセスに困難を抱える視覚障害者に対し、アイサポート仙台では年間500名を超える相談に応じています。見え方の変化や機器更新に伴う継続的な個別支援が欠かせない中、ICT活用は情報取得や孤立防止を支える極めて重要な手段となっています。

障害者地域活動推進センター「きりん」では、日替わりで多様な講座を実施し社会参加の機会を広げると共に、外出活動では公共施設を利用することで施設側の理解促進にもつなげています。当事者が講師を務める講座も行われていますが、活動のマンネリ化を防ぐ内容の工夫や体制の継続性が課題となっています。

読書バリアフリーの面では、PCやスマホでデイジー図書を利用できる環境が整いつつある一方、操作支援や中途視覚障害者への周知は十分とはいえません。加齢により見えにくくなった方々にもサービスが届くよう、支援の充実と積極的な情報発信が求められています。

誰もが生涯を通じて学び、社会参加を継続できるよう、幅広い層が参加しやすい講座づくりと、一貫した支援体制の整備が求められています。

おわりに 令和7年度 仙台市・生涯学習を通じた共生社会推進事業を終えて

昨年度から、仙台市では、障害のあるなしにかかわらず、誰もが地域の一員として社会参加できるような仕組みづくりを目指し、学校卒業後も学びの機会に親しみ、充実した生活を送ることのできる環境づくりのために「生涯学習」を通じた事業を行っています。

今年度は、まとめとして1月31日に「共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 仙台」を開催しました。コンファレンスでは、「自由に学びあい、自由に表現しあう世界をつくる」をテーマにさまざまな取り組みの発表が行われました。

第1部の「アートで、あたらしい世界への扉をひらく」では、いろいろな方法を使いながらアートを通して自分の「好き」や「やりたいこと」を見つけ、それを他の人に伝える、見せるための取り組みについての報告がありました。

第2部の「あたらしい世界の扉としての図書館」では、長く地域の図書館と関わってこられた方から、あらゆる資料を公平公正に収集・蓄積・保存し、全ての人に知る権利、学ぶ権利を保障するという図書館の役割についてお話を伺い、本を読む喜びに加えて、大切な図書館の使命を学ぶことができました。

私が今回のコンファレンスで一番印象に残ったのは、第1部の3つ目の事例報告です。報告では、言葉で意思を伝えることの難しい方々と関わる中で、周囲が「この人には無理だろう」と考えたことでも、工夫次第で何とかできるのではないか、言葉が話せなくても「好きなこと」や「やりたいこ

と」はあるのではないかと考え、ICTを活用した支援に取り組みされた様子が話されました。私は以前から、いわゆる重い障害がある人の自立や社会参加について考えていたため、この報告にはハッとさせられました。「やりたいこと」や「好きなこと」は、その有無も含め他人が決めることではなく、その人自身が決めることです。だとしたら、言葉が話せなければ、その思いを知るための工夫を周囲の人がすべきです。そして、これは障害の軽重に関係なく、いえ、障害の有無にも関係なく、全ての人にとって大切にされるべきことだと感じました。他の報告でも、この視点は大切にされており、今回のテーマの「学び合い」「表現し合う」という点にも通じる部分だと思いません。

私たちの学びは、学校で行うものだけでなく、生きていく間、生涯続きます。この学びが、年齢、障害のあるなし、障害の重い軽いなどで区別されることなく、多様な人々が「好きなこと」や「やりたいこと」を見つけ、同じ好きなことのある人たちと、一緒に学ぶことができるということが重要です。そのためにも、自分の「好き」を知り、いろいろな形で発信できる場をつくっていく、広げていくことは大切です。それが今回の報告にあったのではないかと思います。

このような取り組みが次に続く歩みとなり、それぞれみなさんの地域にも広がっていくように、一人でも多くの人に、興味をもって、見て、感じていただけることを願っています。



梅田真理（宮城学院女子大学教育学部教授）

岐阜県出身。宮城県、仙台市の教員を経て、仙台市発達相談支援センター主査、(独)国立特別支援教育総合研究所総括研究員を経て、現職。特別支援教育の中でも、発達障害のあるこどもの教育を中心に、通常の学級や通級指導教室での指導・支援やアセスメント等を研究している。

文部科学省委託事業

令和7年度「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」

仙台市・生涯学習を通じた共生社会推進事業

企画・運営：仙台市教育委員会

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

発行日 2026（令和8）年3月10日
発行者 仙台市教育委員会 仙台市青葉区上杉 1-5-12
メール kyo019310@city.sendai.jp

企画・執筆・編集 仙台市教育局生涯学習部生涯学習課
伊藤光栄 柴崎由美子
(特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン)
佐竹真紀子（美術作家 / 一般社団法人 NOOK）

デザイン 伊藤光栄

イラスト 佐竹真紀子

写真 三浦晴子（p.11,13～18）



文部科学省委託事業

令和 7 年度「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」